図書館だより

2011年9月1日
第87号
成田高等学校
図書委員会
成田市成田27番地

9月3日から9日まで仮設図書館で企画展・Ⅵを開催
（展示資料提供・成田市消防本部）

「現代の防人」展・Ⅱ

学校図書館館長　高橋春樹

２０１１年３月11日午後２時46分。

この日私は、近隣校で開催の「学校図書館職員の研修会」に参加していた。午後の研修中に強烈な揺れが襲う。「ズンッ！ゴゴォォ！」と不気味な音とともに、右に左にいつまでも大きな揺れが続き書架から本が落下する。過去に千葉県東方沖地震を経験したが、振幅の大きな長い揺れに、それに近い規模だと直感した。事務所のテレビで「地震速報！三陸沖を震源に非常に大きな地震、宮城県北部で震度７を観測、…沿岸部に大津波警報発令」と出た。携帯から自校に電話を入れるが既に不通だった。仮設図書館の書架の転倒が心配で、頻発する余震のなかを帰校すると、幸いにも転倒防止を施した書架は全て無事で、棚の上段から本がずり落ちた程度で済んでいた。

その頃、震源域洋上で発生した巨大津波が東日本太平洋沿岸部一帯に襲い掛かり、黒い濁流となって次々と町を呑み込んでいった。強い揺れの後、高台へと避難した者は命拾いをし、低地にいた者は悉くこの大津波の犠牲者となってしまった。津波が去った跡には見渡す限り堆く積み重なった瓦礫の山。発災前の風景などどこにも無く、そこに無情にも遅い春の雪が降る。日本が戦後最大の国難に直面した瞬間であった。

被災地　福島県相馬市（成田市消防本部撮影）

翌12日、原子炉が冷却不能に陥っていた福島第一原子力発電所では、１号機建屋が爆発して吹き飛び、後に２～４号機も爆発、放射能物質が漏れることにより周辺住民には避難指示が出され、事態は深刻度を増していった。

一方、首都圏では旧湖沼、河川沿いや湾岸埋立て地域で発生した液状化現象により多くの住宅地が被害に遭っていた。地震発生直後からＪＲ・私鉄ともに運転を見合わせたため交通網は完全に麻痺状態に陥り、

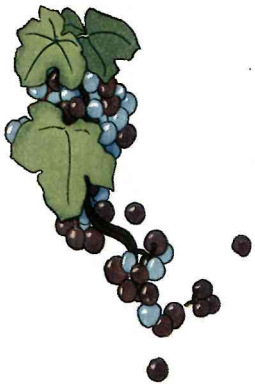
家族との通信連絡が途絶されたなか、徒歩で自宅を目指す者が列をなし、都内では10万人以上が帰宅難民となる大混乱を招いていた。本校でも１００名ほどの生徒が帰宅困難となっていた。

この震災では、直後に出動の自衛隊ヘリが、海岸に迫り来る何波もの大津波を撮影していた。大地震そのものと、繰り返す大津波による甚大な被害が特徴だ。東北太平洋沿岸の広範な被災地には自衛隊、警察、消防、海上保安庁、米軍、そして世界20カ国から派遣の災害救助隊が展開し、慎重に取り除いた瓦礫の中から生存者を救助する。しかし、努力空しく多くは津波による溺死者として発見に至っている。

地震と津波により引き起こされた福島第一原発事故では、自衛隊や消防隊（東京消防庁、大阪市消防局、横浜市消防局など）が目に見えぬ非常に高いレベルの放射能と闘いながら、不休の放水活動を行った。

地震大国日本では、「いつでも、どこでも」発災の危険があるが、誰もが自分の身の回りでは起きてほしくないと願っている。しかし、この度の大震災を機に多くの国民が地震に対する常なる備えを肝に銘じた。

今期展では、成田市消防本部の協力を得て、東日本大震災に出動の「緊急消防援助隊千葉県隊」に参加した際の現地活動の様子を写真で紹介する。



図書委員会では去る6月9日、成田市消防本部並びに公津分署を訪ね取材を行なった。本校卒業生も多く勤務していると聞き、頼もしくそして誇らしく思えた。

消防本部を訪ねると、伊藤新一成田市消防長に迎えられ、消防の仕事や成田市消防の構成、そして東日本大震災への「緊急消防援助隊千葉県隊」出動について話を伺うことができた。

私たちの興味は、被災現地の様子や隊員たちの活動、宿泊や食事にまで及んでいたが、とても丁寧な対応が印象的だった。

「取材記　その1　消防本部を訪ねて」

館　長「成田市の消防からも東日本大震災の支援に出動したのですか？」

消防長「消防庁長官からの要請を受けた緊急消防援助隊千葉県隊として出動しました。」

館　長「緊急消防援助隊とはどのような組織になっていますか？」

消防長「阪神・淡路大震災での教訓（人命救助活動等を行う応援部隊の早期出動の必要性等）を踏まえ、平成7年度に創設されその後、平成15年6月に消防組織法の改正により法制化され、平成16年4月から施行されました。大規模災害や特殊災害が発生した際に、発災地の市町村長・都道府県知事の要請あるいは消防庁長官の指示により、これらの部隊が出動します。この度の東日本大震災の発生を受けて、3月11日から6月6日までの88日間に、全国44都道府県から総派遣人員２８、６２０名が被災地に派遣されました。千葉県隊も派遣要請を受け、成田からもこれに出動いたしました。」

館　長「この度の出動先と人数は？」

消防長「福島県に、成田からは救急隊3名と後方支援隊3名の一組6名を、第1次から第7次派遣隊まで、合計42名の隊員が出動しています。福島第一原発から20～30㎞圏内への出動で、放射線という見えない危険に対して大きな不安があるなかで、隊員たちの士気は頗る高く派遣要請を快諾してくれました。また隊員のご家族の理解と応援を得られたこと

に対して、深く感謝しています。
成田高校の卒業生も多く勤務していますが、派遣隊に参加の隊員もいますので、是非彼らの話を聞いてみてください。」

続いて、医療チームの一員として活動した救急救命士の永嶋隊員に話を伺った。

館　長「どのような活動でしたか？」

永　嶋「南相馬市での在宅看護者に対する巡回医療支援です。この地区に入ったのは、長崎医大、長崎医師会、福島医大の3チーム。私は4月4日に福島医大チームに参加しました。医師1名、保健士1名、救命救急士1名、自衛隊5名の計8名が、自衛隊のジープの先導で、通院不能になってリストアップされた11戸を訪問し、診察・投薬を行いました。」

館　長「当時の南相馬市の医療状況は？」

永　嶋「『屋内退避』（後に避難指示が出された）の区域で、屋内に人はいても町には人影も少なく、すでに自主避難をした方も多かったと思われます。診療所等も被災して稼動していたのは南相馬市総合病院のみ、満床で外来診療に限られていました。」

館　長「この度の派遣を経験してどのように感じていますか？」

永　嶋「被災地の力になれて良かった。このように、移動手段が無く通院できない方々のケアーをどうするのか、大変深刻な問題だと痛感しました。」

※救急救命士　厚生労働省国家資格所有の隊員で、心肺停止状態の傷病者に対し、静脈路確保、気道確保、薬剤投与、除細動などの特定行為を行う。

「取材記　その2　公津分署を訪ねて」

6月9日、公津分署を広報班が訪れた。緊急消防援助隊に参加の隊員のなかから、本校卒業生を中心に10名の隊員に迎えられ、充実した取材を行うことができた。

赤坂消防署が建替え工事中のため、公津分署に合同署を設けていた。この日、中庭には出動先の福島で隊員が寝泊りに使用したテントを張り、携帯した食料・装具等一式を見せてもらうことができた。

レトルト食品の湯煎や味噌汁作りのコンロ→

←分署中庭に張られたテントのなかに簡易ベッドや寝袋、イステーブルを置いて再現された

「公津分署の構造」

高校2年C組　岩本鷹丸

私達は赤坂消防署公津分署へ訪問取材を行った。公津分署は、平成21年4月1日、近年の救急要請の急増に対応するために成

田市の江弁須に開署した。建物自体の構造は鉄筋コンクリート造の二階建てでもちろん耐火建築物である。敷地面積は3，143㎡。現在、赤坂消防署が建替え工事中のため赤坂署の機能もこの分署に移している。

公津分署には広報車1台、水槽付消防車1台、高規格救急車1台、合計3台の車両が配備されている。敷地内には訓練塔があり、その高さは7mにも及ぶ。この高さの理由は、高所から低所にいる人々を助け出すというシチュエーションの訓練を、より実践に近づけるためだという。棟の壁面には赤い円が描かれ、その円は、ロープで降りていく際に足を付き、また足で蹴り離すポイントであることを示している。

この分署の建物内部には、事務室はもちろん会議室や訓練室もあり、中には子供達が防災について楽しく学べる「防火学習室」がある。また、2階を見上げると、消防職員の服装や、救急隊員の出動服を着せたマネキンが出迎えていて楽しい。

「緊急消防援助隊」

高校2年E組　大倉聖也

3月11日に起きた大地震の発生を受け、成田市からも福島県に出動の「緊急消防援助隊千葉県隊」に消防隊員が参加した。1隊6名（救急部隊に3名、後方支援部隊に3名）を第1次から第7次にわたり合計42名を派遣している。

都市部の福島市などでは、被災地のなかでも比較的被害の少ない地域で都市としての機能を果たしていた。しかし、沿岸部にある福島第一原子力発電所の付近は、地震に加えて津波の被害が大きな地域で、原発事故を受けて放射能汚染が心配されていた。

→現地では放射線被爆防護衣を着用した

「緊急消防援助隊」の活動は、生存者の捜索による人命救助、そして瓦礫の処理にまで及ぶものだった。これらの活動は、原発事故により発生した放射能汚染から身を守る為、常に線量計と防護服の着用を義務付けて行われていた。

この日は、救急隊員が現地での防護衣を着用し、また、放射性物質の付着を防ぐため救急車の内部をビニールシートで覆うなどの再現をしていただいた。

→現地に行った「高規格救急車」

私たちが興味を持った緊急消防援助隊の被災地での生活について質問すると、「当初は、福島市内にある福島県消防学校の訓練棟1階での宿泊からスタートしたのですが、大きな余震が頻発することから、校庭に設営したテントでの宿泊になりました」

取材時には、公津分署の中庭に実際に現

地で使用したテントを設営していただいた。6m×6mの大きさで、人が立って歩ける高さがあり、エアーボンベで太い支柱に空気を注入するタイプのテントで、そこに簡易ベッドに寝袋、食事は毎日レトルト食品や缶詰類のみ。プロパンガスのコンロを使用して、レトルト食品の湯煎や味噌汁などを作ったという。また、電気事情を考慮して使用する電気はパソコンと蛍光灯そして連絡用の携帯電話の充電時のみという徹底ぶりであった。

隊員に質問する広報班員↓

私は、この取材を通して「緊急消防援助隊千葉県隊」に出動の隊員の方々が、被災地の為に自らの身を賭し、全力で行動したのだということを強く感じた。本校卒業の先輩方をはじめ隊員の皆様が、市民生活の安全を守るため、今後ますます活躍されることをお願いしたい。

「負けない心」

高校3年E組　飯田　響

3月11日の地震発生当日、消防の通信は麻痺状態になったが、非番の隊員達も各所属署に参集した。各署隊員は、即座に配備車両を点検し無事を確認すると30件を超す救急要請を受け出動した。特徴的だったのは、成田空港で動けなくなった人々で、大きな地震による不安が原因の過呼吸が多かったそうだが、この日は幸いにも管内での火災の発生は1件もなかった。

→隊員のブーツの跡で黒くなった降下訓練壁

取材に伺った6月9日は、ロープを使った救助訓練を見学することができた。日々の訓練の目的を尋ねると、毛呂隊長は即座に、「負けない心をつくるため」だと答える。赤坂署公津分署には、ザイルなどを使い下降する訓練を行うための降下塔がある。そこには、急降下した際に付いたブーツの跡が無数に残っていて、日々の訓練の厳しさを物語っている。

この日は、従来のロープを使った降下法の他に、利便性の向上したエイト環とナイロンザイルによる訓練も披露された。これらを繰返し身体が覚えこむまで、そしてその技術を何時でも発揮できるよう訓練の積み重ねの日々が続く。今回は見学することができなかったが、瓦礫に埋まった人を救助する為の穴を開ける訓練なども行っている。当然これらに用いる各種器具・電動機材等の点検も欠かせない日課だという。

毛呂隊長は「例えば、救助活動の現場で危険な状況のなか、誰かを指名した時に『怖くて行けない』のでは話になりません。そうならないために日々の辛い訓練を行っているのです」と即座に言う。隊員の方々の、厳しい訓練への意気込みを肌で感じ取る一日となった。

協力してくれた派遣隊員の皆様と、公津分署車庫前で記念写真を↓

成田市消防本部
Narita Fire Department

成田消防のミニ豆電知識

■**成田市消防本部**は、成田市役所との合同庁舎地下1、2階に設置されている。成田市の消防は4署4分署で構成されており、242名が勤務している。

その管轄地域には、それぞれ特徴があり、地域に対応する消防車両が配備されている。

●**成田消防署&飯岡分署**

年間1000万人の参詣客を迎える成田山新勝寺の門前町である旧市街地や、周辺の野毛平工業団地や豊住工業団地、土屋地区の商業地域等を管轄。また、北部エリアには、広大な水田、林野、利根川などを含む。

車両の特徴に、40㍍級はしご車、大型化学車等を配備。

←40㍍級はしご車

●**赤坂消防署&公津分署**

成田ニュータウン、美郷台、公津の杜などの住宅地を管轄。管内人口は全市の約半数を占める。また北西部には、印旛沼と広大な水田。宗吾霊堂や麻賀多神社などの由緒ある神社、また坂田が池総合公園などの市民の憩いの場を管轄する。

この地域に対応の屈折はしご車を配備。

屈折はしご車→

●**三里塚消防署&空港分署**

成田市南部、管内に成田国際空港があり、その一日の流動人工は市の人口を大きく上回る。空港に対応すべく航空機災害用大型化学車を配備。

←大型化学車

●**大栄消防署&下総分署**

成田市の東側・北側の大栄工業団地や空港関連企業、また下総地区滑川観音には国指定重要文化財の建築物があり、山林など豊かな自然を残し、管内面積は市全体の約半数を占める。化学車を配備。

←水槽付消防車

上記の常備消防の他に、地域に根ざした防災の「要」として一翼を担うのが消防団員です。

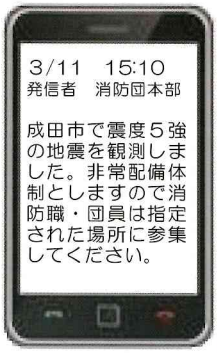
◆**消防団員**

前述の常備消防が地方公務員であるのに対し、消防団員は、他の職業に就いている一般市民で構成される。自治体からは装備と僅な報酬が支給され、その活動はボランティア精神で成り立っている。

成田市消防団は、12分団97ケ部、団員数約1500名で構成する。その強大な動員力を背景に広域災害での活躍が期待され、火災の消火作業はもとより、消防隊の支援活動や地域の防災リーダーとしての役割などその任務は多岐にわたっている。

消防団員は、各々別に職業を持ちながら、いざ災害が発生すると昼夜を分かたず参集し、常備消防とともに災害の防御にあたる。時にその活動は夜を徹することも珍しくない。

団員の多くがサラリーマン化している現在、その任務は過酷なものとなっているが「郷土愛護の精神」のもと、団員一丸となって「市民が平和で安心して暮らせる国際都市、成田」を目指し日夜努力している。



←3月11日、消防団員に配信のメール（イメージ）

消火活動　消防車で駆けつけ火災現場に到着すると、まず消防用水を確保する。燃焼規模や風向きなどの状況を考慮して消火活動。火災拡大の恐れがあれば周囲の建物への延焼阻止も重要で、理論的な消防戦術を駆使する。

救急活動

救急車で救急患者を病院に搬送する活動。正確な観察と迅速・的確な処置をして病院に搬送する。

救助活動　要救助者を危険な状況・場所から救出。救助活動には日々の訓練による強靭な肉体と救助技術が要求される。

通信指令業務　119番通報を受信し、火災・救急の内容によって迅速に出動指令を出す。出動後は無線での現地誘導や詳細内容を指示する。また気象情報の受信・伝達業務を行う。

車両・装備の点検・整備　災害現場で装備の性能が十分発揮されるために、十分なメンテナンスが必要。車両・装備品の点検が欠かせない。

査察・検査業務

ガソリンスタンドや工場等の危険物施設や大規模遊戯施設などを対象に消防用設備の点検を実施し、法令等に適合しているか検査する。

警戒活動　大規模な行事やイベント、火気を使用する花火大会などの催事の際に観客や周辺住民に危険が及ぶ恐れがあるときは、その場所で待機し迅速な対応がとれるような体制を敷く。

救命講習会　救命率の向上を目指して、一般市民や、学校関係を対象に、心肺蘇生や応急処置法を指導する。

地理・水利調査業務　管轄地域の全ての道路・消火栓、川や池に至るまでの水利を把握し、常日頃から通行不可能な道路がないか、水利が有効に利用可能かなどを調査し、各種災害や救急に備える。

訓練　消火や救助活動を行うため、消防隊員は常に実際の現場を想定した様々な訓練に励み、体力練成、ポンプ操法、応急処置などの基本訓練、テロなどの特殊災害を想定した応用訓練などを行う。

危険排除活動　交通事故などで車の燃料が漏れたり、海や川に大量の油が流出した時に、パーライトやオイルフェンスなどを使ってこれを取り除く活動。

消防団の指導　地域防災を担う消防団にポンプ操法の指導・基本的な消火戦術の講義を行う。防災訓練などでは消防団と連携して活動し、実際の火災現場で連携がとれるような体制をとっている。

建築確認　建物を建てるときには、消防の同意が必要。火災等が発生した場合、被害を最小限に食い止め人命を守るため、消防用設備の設置数や場所など法令に適合しているかを判断する。

今回の取材で訓練やテント設営、そして防護服姿の再現など、ご協力をいただいた派遣隊員の方々（赤坂消防署公津分署を訪問して）

（右から）
山口惇一隊員　成田消防署特別救助隊
花森優輝隊員　成田消防署特別救助隊
久保木章智隊員★　成田消防署特別救助隊
毛呂克己隊員　成田消防署特別救助隊長
三谷学士隊員★　赤坂消防署
永嶋弘明隊員　三里塚消防署空港分署
富井貴栄隊員★　赤坂消防署公津分署
阿部将也隊員★　消防本部総務課
高橋幸樹隊員★　消防本部警防課
山田克己隊員★　消防本部警防課
（★は本校卒業生）

館長が推奨するこの二冊！

『大地震に備える』自分と大切な人を守る方法

渡部実著　中経出版発行
請求記号　364・ワ

大地震が発生した時、自分と自分の大切な人の命を守る為に必要なことを「普段の準備」「地震直後」「地震発生から1週間を乗り切るまで」などの状況別に分かり易く紹介されている。
是非ご一読を！

『ドッグテールズ』

樋口明雄著　光文社発行
請求記号　913、6・ヒ

愛犬の予期せぬ死ゆえ、ペットロスに打ちひしがれる夫婦。ふたりの心がすれ違うなか、ある晩、月明かりのなかで仔犬の鳴く声が聞こえ……。

「グッドバイ」他、犬との出会いや絆をリリカルに描いた全5編を収録する。

図書貸出統計

平成23年度　第1学期貸出冊数
（4月から7月まで）

高校生貸出利用数	1，728冊
中学生貸出利用数	3，422冊
教職員貸出利用数	186冊
合計	5，336冊

編集後記

『本のテーマパーク』を目指した図書館運営がようやく軌道に乗った。利用に活況を呈していることは、3号館で学ぶ中学生にとって立ち寄りやすい環境となったことが大きい。今年度は貸出総冊数1万冊を目標に、「楽しい学校図書館」を目指す。

さて、自衛隊の災害派遣をテーマに「現代の防人」展を開催したのが奇しくも東日本大震災の半年前のこと。自衛隊は、この度の大規模な災害に即応し、発災初日に1万5千名が、6日目には10万6千名が被災各地に展開し、初期の救助・捜索活動に加え、物資の輸送や瓦礫除去等の復旧支援を行った。

一方、消防では原子炉冷却への放水活動を行うハイパーレスキュー隊がクローズアップされ周知となったが、各都道府県から派遣の「緊急消防援助隊」の存在は知られる事が少なかった。そこで、今号では被災地派遣に出動の成田市消防隊を特集した。

併せて9月3日から9日まで、成田市消防本部より資料の提供を得て、派遣隊記録写真展を開催する運びとなっている。

高橋記